

インフルエンザとは

- インフルエンザは、インフルエンザウイルスがのどや気管支・肺で感染・増殖することによって発症する病気
- インフルエンザの発症者は0～9歳の小児が約半数
- インフルエンザによる死亡者は65歳以上の高齢者が大部分を占めている



インフルエンザウィルスについて

- インフルエンザの原因となるインフルエンザウィルスは、大きく分けてA型、B型、C型の3つに分類される
- このうち大きな流行の原因となるのはA型とB型
- A型にはソ連型と香港型がある
- 流行するウィルス型は各国地域で、またその年ごとに異なる



インフルエンザは風邪じゃない

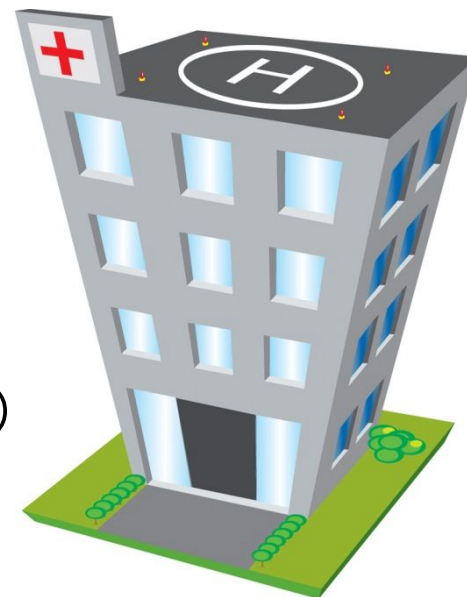
	風邪（感冒）	インフルエンザ
原因ウイルス	ライノウイルス、コロナウイルス、アデノウイルスなど	インフルエンザウイルス
発症時期	1年を通じ散発的に発症	主に冬季に流行
流行規模	特定地域	全国～世界的規模
感染力	弱い（だらだらと拡がる）	強力（急速に拡がる）
主な症状	<ul style="list-style-type: none">・微熱（37～38℃）・上気道症状（せき、のどの痛み、鼻水、くしゃみなど）	<ul style="list-style-type: none">・高熱（38℃以上）・頭痛、全身症状（腰や筋肉など全身の痛み、倦怠感）・上気道症状（せき、のどの痛み、鼻水、くしゃみなど）
治療	<ul style="list-style-type: none">・安静、補液（水分摂取）・対症療法	<ul style="list-style-type: none">・安静、補液（水分摂取）・対症療法・抗インフルエンザウイルス薬

インフルエンザと新型インフルエンザとの違い

- 新型インフルエンザは、これまで人の世界で流行を起こしたことがないウイルスがトリやブタなどから人の世界に入り、ヒトからヒトへ感染するようになったもの。
- 新型インフルエンザは、毎年流行を繰り返す季節性インフルエンザと異なり、一般の人の多くが免疫を持っていないため、感染が拡大しやすく私たちの健康や社会生活に大きな影響を与える可能性がある。
- 近年では、大正7（1918）年、昭和32（1957）年、昭和42（1968）年、平成21（2009）年に新型インフルエンザが発生した。
- 次の新型インフルエンザがいつ出現するのは誰にも予測できないが、ほとんどのヒトが免疫を持たない未知のウイルスであり、容易にヒトからヒトへ感染して拡がり、急速な世界的大流行（パンデミック）を引き起こす危険性あり。

インフルエンザの診断

1. 典型的な症状
2. 迅速診断キット（ウイルス抗原を検出）
 - 発症後6時間以内の感度：約60%
 - 発症後6～12時間以内の感度：約75%
 - 発症後12時間以上の感度：80%以上



つまり、発症後早期（12時間以内）でも約3分の2は陽性となる。

症状が出現して早期に検査した迅速診断キットの結果が陰性であった場合は、症状や患者周囲の発生状況などを総合的に判断して、インフルエンザ疑いが強ければ抗インフルエンザ薬を服用した上で、翌日再検査を行う

インフルエンザの治療

1. 一般療法

安静、休養、睡眠、補液（水分摂取）

2. 薬物療法

①原因療法（抗インフルエンザ薬）

- ・ オセルタナビル（商品名タミフル）内服5日間
- ・ ザナミビル（商品名リレンザ）吸入5日間
- ・ ラニナビル（商品名イナビル）吸入1回
- ・ ペラミビル（商品名ラピアクタ）点滴1回
- ・ その他 → 年齢・症状などにより使い分ける



※抗インフルエンザ薬で治療すると、翌日には半数の人が平熱に、その次の日には80%以上の人々が平熱になる。しかし、熱が下がっても指示通りに薬を服用することが大切！（発症後7日間は感染力あり）

②対症療法

- ・ 解熱鎮痛薬
- ・ その他

新型を含むインフルエンザ治療の考え方 (世界が認めた日本の医療レベル)

【以前】

日本：「発症2日以内なら抗ウイルス薬を服用すべき」

世界：「健常成人では抗ウイルス薬の投与は必ずしも必要ではない」「大部分の健康人においては抗ウイルス薬による治療は不要」

【現在】

世界：「若年でも重症・進行性ではできるだけ早く抗インフルエンザ薬を投与すべき」

「リスクなしの軽症でも発症48時間以内なら抗ウイルス薬投与を考慮すべき」



つまり、抗インフルエンザ薬の使用指針はわが国の考え方が正しかった、と言える。

インフルエンザの予防

1. ワクチン接種

2. 日常生活の注意

- ① 正しい「手洗い」や「うがい」
- ② マスクなどの「咳エチケット」
- ③ 適度な湿度（50～60%）を保つ
- ④ 十分な休養・睡眠とバランスの取れた栄養摂取
- ⑤ 十分な水分補給
- ⑥ 人混みへの外出を控える

※ 不織布（ふしょくふ）マスクとは

- 不織布とは「織っていない布」という意味
- 繊維あるいは糸などを織ったりせず、熱や化学的な作用によって接着させて布にしたもの
- 市販されている家庭用マスクの約97%は不織布マスク



外出したあとは、こまめに、ていねいに手洗いを



症状があるときはマスク、せきエチケットも必ずし

咳きエチケットとは？

- 咳きやくしゃみをするときは、周囲の人からできる限り2m以上離れてください。
- 咳きやくしゃみをするときは、他の人から顔をそらして、ティッシュなどで口と鼻を覆いましょう。
- 咳きやくしゃみを抑えた手を洗いましょう。
- マスクを着用してください。



インフルエンザワクチンについて

- 最も大きな効果は、重症化（肺炎などの合併症が出現すること）を予防する効果。
- 65歳未満の健常成人で70～90%の発症予防効果あり
- 65歳以上の健常な高齢者で約45%の発症予防効果あり
- ワクチンの予防効果が期待できるのは、接種した2週間後から5ヶ月程度。インフルエンザは毎年12月～3月頃に流行することから、毎年12月中旬までにワクチン接種することが望ましい



新型インフルエンザ2009の総括

【結果】

- ① 世界中で多くの患者・死亡者が出た
- ② 国や県の対応・指示に統一性がなく、社会が混乱した
- ③ 日本は世界で最も低い死亡率であった（米国の約1/25）
- ④ 特に日本では妊婦は1人も死亡しなかった

【教訓】

- ① ウイルスの性質や流行状況に応じた柔軟かつ迅速な体制が必要
- ② マスク・手洗いなどの感染予防策が有効
（日本人の衛生観念の高さが実証された）
- ③ 迅速診断キットを用いた早期診断が有効
- ④ 抗インフルエンザ薬による早期治療が有効
（大多数は発症後2日以内に投与された）
- ⑤ 医療従事者の高いワクチン接種率が有効
（多くの施設は90%以上）



インフルエンザQ&A (1)

- ▶ Q1 平成21(2009)年に流行した新型インフルエンザは、どうなったのですか？

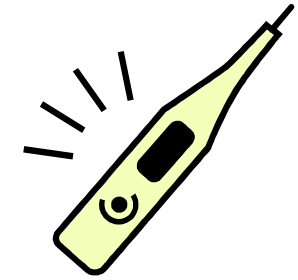
(答) 世界的大流行(パンデミック)を起こした新型インフルエンザ2009は、人々が免疫を持つようになり通常の季節性インフルエンザと似た性質となった。

- ▶ Q2 抗インフルエンザ薬(タミフルなど)の服用後に異常行動による転落死などが報道されましたが、どう対応すればよいのですか？

(答) タミフル服用の有無にかかわらず、異常行動(急に走り出す、ウロウロするなど)はインフルエンザ自体に伴って発現する場合があります。このため、医薬品服用の有無にかかわらず、少なくとも2日間、保護者は小児・未成年者が1人にならないように配慮して下さい。



インフルエンザQ&A (2)



- ▶ Q3 インフルエンザにかかったら、どのくらいの期間外出を控えればよいですか？

(答) 一般的に発症後3～7日間はウイルスを排出するといわれています。つまり、熱が下がってもしばらくはウイルスの感染力は残っているため、他人に感染させる可能性があります。このため、熱が下がっても最低2日間は自宅安静をお願いします。

- ▶ Q4 インフルエンザワクチンによって起こる症状(副反応)にはどのようなものがありますか？

(答) 比較的多い副反応としては、局所の赤み・はれ・痛みなどが10～20%に起こり、通常2～3日でなくなります。全身性の反応としては発熱・頭痛・寒気・だるさなどが5～10%に起こります。なお、非常に重い副反応として急性脳症・けいれんなどが報告されています。

インフルエンザQ&A (3)

- ▶ Q5 インフルエンザワクチン接種でインフルエンザを発症することはありませんか？

(答) インフルエンザワクチンは不活化ワクチンです。不活化ワクチンは、ウイルスの病原性を無くし免疫をつくるのに必要な成分を取り出して作ったものです。このため、ウイルスとしての働きはないので、ワクチン接種によってインフルエンザを発症することはありません。

